

南島原市文化財調査報告書 第24集

野 中 遺 跡

—県営畠地帯総合整備事業（担い手育成型・原尾地区）に伴う発掘調査—

2021

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書 第24集

野 中 遺 跡

—県営畠地帯総合整備事業（担い手育成型・原尾地区）に伴う発掘調査—

2021

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書には、県営畠地帯総合整備事業（担い手育成型・原尾地区）に伴う南島原市有家町野中遺跡の発掘調査成果を収録しております。

この調査では、弥生時代の竪穴建物跡や、甕棺墓、廃棄土坑といった遺構及び弥生土器、縄文土器、磨製石斧など多くの遺物が出土しています。今回の調査を踏まえ、今後も市内遺跡の研究に邁進する所存です。

また、近年、南島原市内において大型の県営基盤整備事業が継続的に展開されており、それに伴う緊急発掘調査件数が著しく増加しております。緊急発掘調査の目的は、事業によって失われる遺跡を記録として残すことにあります。本来であれば、埋蔵文化財は現地保存が望ましいものです。そのため、今後とも事業主体者と十分な連携を図り、最大限遺跡の現地保存に努めてまいります。

最後となりましたが、本書を刊行するにあたって、発掘調査に従事された方々をはじめ、地元の方々及び関係機関の皆さまに多くのご協力を頂きました。厚く御礼を申し上げ、巻頭のあいさつとさせていただきます。

令和3年3月31日

南島原市教育委員会

教育長 永田 良二

例　　言

- 1 本書は、野中遺跡（長崎県南島原市有家町原尾名字野中所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長崎県が事業主体である原尾地区県営畠地帯総合整備事業（担い手育成型・原尾地区）に伴い実施した。
- 3 平成16年度の現地調査は、有家町教育委員会が主体となって実施した。平成18年度の現地調査は、市町村合併に伴い、南島原市教育委員会が調査を引き継ぎ実施した。また、整理調査は、南島原市教育委員会が主体となって実施した。調査体制は以下のとおりである。

現地調査体制（平成16年度）	有家町教育委員会	教育長	松島 吉郎
		教育次長	田出 義正
		課長補佐兼社会教育係長	野原 文博
		社会教育係	荒木 伸也(調査担当)
(平成18年度)	南島原市教育委員会	教育長	菅 弘賢
		教育次長	井口 敬次
		文化財課長	田島 健剛
		文化財課 主査	荒木 伸也(調査担当)
整理調査体制	南島原市教育委員会	教育長	永田 良二
		教育次長	栗田 一政
		文化財課長	岡野 博明
		文化財課文化財班長	梶原 知治
		文化財課文化財班 主事	小川 慶晴(調査担当)

- 4 現地調査における写真撮影は、荒木が行った。遺構配置図及び個別遺構図の作成は、株理蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。航空写真的撮影は、(有)スカイサーバイ九州に委託した。
- 5 遺物実測図の作成及び製図作業は、㈱プロレリックに委託した。
- 6 本書に関する遺物、図面、写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室に保管している。
- 7 本書の執筆・編集は、小川による。

本文目次

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査の概要	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査方法と調査経過	3
第Ⅲ章 調査の成果	4
第1節 土層	4
第2節 遺構	4
(1) 1号竪穴建物跡	7
(2) 2号竪穴建物跡	8
(3) 売棺墓	10
(4) 廃棄土坑	12
第3節 出土遺物	12
(1) 土器・陶磁器	12
(2) 石器	16

挿図目次

第1図 野中遺跡位置図 (S= 1/1,000,000)	1
第2図 野中遺跡周辺遺跡位置図 (S= 1/60,000)	2
第3図 本調査区位置図 (S= 1/5,000)	3
第4図 土層断面実測図 (S= 1/150)	4
第5図 平成16年度調査区遺構配置図 (S= 1/250)	5
第6図 平成18年度調査区遺構配置図 (S= 1/250)	6
第7図 1号竪穴建物跡実測図 (S= 1/40)	7
第8図 1号竪穴建物跡出土遺物実測図 (S= 1/3)	7
第9図 2号竪穴建物跡実測図 (S= 1/60)	8
第10図 2号竪穴建物跡出土遺物実測図 (1~10: S= 1/3, 11: S= 1/4)	9
第11図 売棺墓実測図 (S= 1/20)	10
第12図 売棺墓出土遺物実測図 (S= 1/5)	11
第13図 廃棄土坑実測図 (S= 1/20)	12

第14図 出土土器・陶磁器実測図① (S= 1 / 3)	13
第15図 出土土器・陶磁器実測図② (S= 1 / 3)	14
第16図 出土土器・陶磁器実測図③ (S= 1 / 3)	15
第17図 出土石器実測図① (S= 2 / 3)	16
第18図 出土石器実測図② (S= 1 / 3)	17
第19図 出土石器実測図③ (17・18・20: S= 1 / 4, 19: S= 1 / 5)	18
第20図 出土石器実測図④ (21~23: S= 1 / 3, 24: S= 1 / 4)	19

表 目 次

第1表 1号竪穴建物跡出土遺物観察表	7
第2表 2号竪穴建物跡出土遺物観察表①	10
第3表 2号竪穴建物跡出土遺物観察表②	10
第4表 墓棺墓出土遺物観察表	11
第5表 出土土器・陶磁器観察表①	15
第6表 出土土器・陶磁器観察表②	16
第7表 出土石器観察表	20

図版目次

図版 1 遺跡上空から有明海を望む(北から)…23	図版 8 磨製石斧出土状況…30
図版 2 平成16年度調査空中写真(写真下が北側)…24	石錐出土状況…30
図版 3 平成18年度調査区南側(北西から)…25	敲石・磨石出土状況…30
平成18年度調査区南側作業状況(南西から)…25	図版 9 1号竪穴建物跡出土遺物…31
図版 4 平成16年度作業状況①…26	2号竪穴建物跡出土遺物…31
平成16年度作業状況②…26	図版10 墓棺墓出土遺物…32
平成18年度測量作業状況…26	出土土器・陶磁器①…32
図版 5 1号竪穴建物跡検出状況…27	図版11 出土土器・陶磁器②…33
1号竪穴建物跡完掘状況…27	出土土器・陶磁器③…33
2号竪穴建物跡完掘状況…27	図版12 出土土器・陶磁器④…34
図版 6 墓棺墓検出状況…28	出土土器・陶磁器⑤…34
廃棄土坑検出状況…28	出土石器①…34
廃棄土坑出土遺物…28	図版13 出土石器②…35
図版 7 繩文土器口縁部出土状況…29	出土石器③…35
縩文土器底部出土状況…29	図版14 出土石器④…36
土器・磨製石斧出土状況…29	出土石器⑤…36

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

野中遺跡は、長崎県南島原市有家町原尾名字野中に所在する遺跡である。野中遺跡を含む南島原市内の遺跡は、長崎県県央地域から南東に突き出す島原半島を一つの文化圏に属するものとして捉えることが多い。

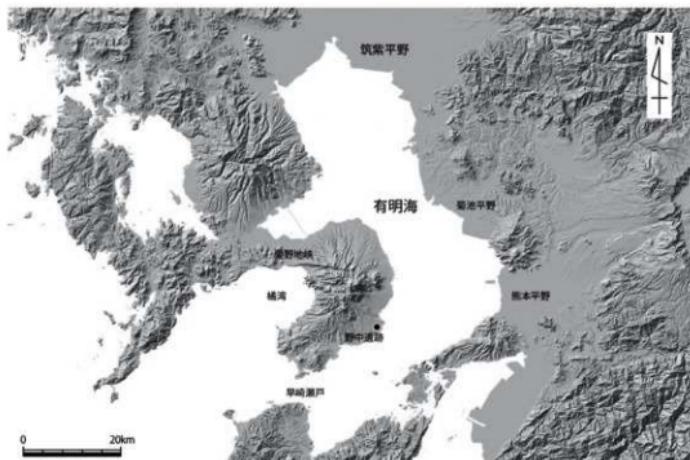
島原半島は、東西約15km、南北約40km、外周は約100kmである。その形状は特異であり、「胃袋状」、「ソラマメ形」などと形容される。半島最大の特徴としては、中央にそびえる雲仙火山の山々が挙げられよう。最高峰の平成新山（1,483m）を中心として、普賢岳（1,359m）、国見岳（1,347m）、妙見岳（1,333m）等が連なり、これらが作り出した火山灰性の土壤や地形は、現代に至るまで島原半島における人類の活動に大きな影響を与えている。

半島の周辺は、南岸に接する早崎瀬戸を除き、東岸の有明海、西岸の橘湾など、ほとんどが波の穏やかな海に囲まれている。特に有明海は筑紫平野や熊本平野、菊池平野などと通じ、古来より海を介した活発な文化交流がなされている。また、半島北西部は愛野地峡を通じて県央地域と陸続きになっている。

野中遺跡は島原半島の東側、雲仙火山から放射状に伸びる谷筋に挟まれた台地上に位置する。遺跡の標高は約70mである。周辺は緩やかな台地と谷を繰り返す地形であり、台地上の緩斜面を利用した畑地が一帯に広がっている。

【参考文献】

有家町郷土誌編纂委員会編 1981 「有家町郷土誌」 有家町



第1図 野中遺跡位置図 ($S = 1/1,000,000$)

第2節 歴史的環境

南島原市内には、現在約190の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として存在しており、うち58の遺跡が有家町内に位置している。以下は、野中遺跡周辺の主要な遺跡について時代ごとに述べる。なお、旧石器時代、古代を主体とする遺跡は、周辺では確認されていない。

縄文時代では、西鬼塚石棺墓・石棺群、堂崎遺跡、蒲河遺跡が挙げられる。いずれも長崎県学芸文化課による調査歴がある。西鬼塚石棺墓・石棺群では、支石墓と箱式石棺墓が確認され、一部はマリンパークありえ内に移設復元している。堂崎遺跡、蒲河遺跡は、有明海沿岸の海中干潟に見られる潮間帯遺跡で、縄文後・晚期土器のほか多くの礫器、石錘が確認されている。

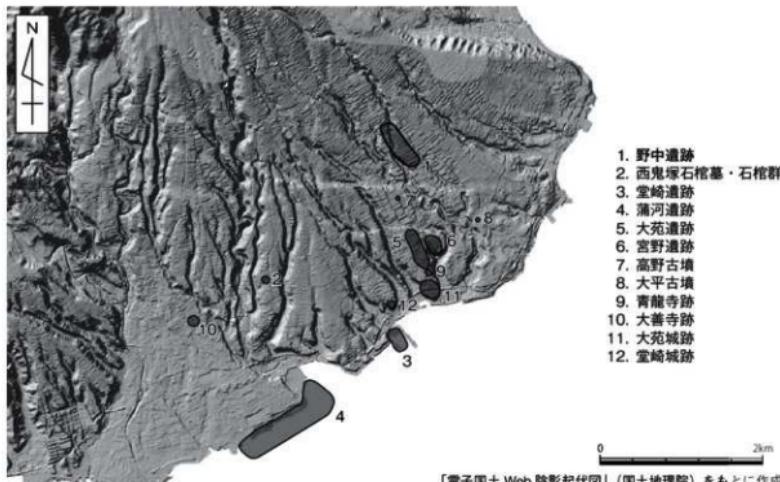
弥生時代の遺跡としては、大苑遺跡、宮野遺跡がある。いずれも大苑地区県営基盤整備事業に伴う発掘調査が実施されている。大苑遺跡では、弥生時代中期の甕棺墓や柱穴列が確認された。宮野遺跡では、弥生時代中・後期の土器が主体として検出されている。

古墳時代では、高野古墳、大平古墳などがある。高野古墳は昭和30年代に九州大学が調査しており、土師器、須恵器、鐵鎌、ガラス玉が出土している。大平古墳は、有家町史跡調査委員会による調査が行われており、須恵器片を表探している。

中世期には寺院跡や城跡が点在する。寺院跡としては、青龍寺跡や大善寺跡がある。青龍寺は、沖田綱の戦いに臨む島津軍が本陣とした場所である。大善寺跡は、島原・天草一揆以後に廃された寺院で、現在の有家町専念寺の前身であるとされている。城跡には大苑城跡、堂崎城跡などがある。堂崎城跡は、フロイスの『日本史』に記録が残されており、有馬氏一族の居城であったとされる。

【参考文献】

- 有家町郷土誌編纂委員会編 1981 「有家町郷土誌」 有家町
吉永重人・藤原憲之編 1980 「有家町内における文化財の分布調査」 有家町の文化財調査報告書第1集 有家町教育委員会
本多和典編 2018 「大苑遺跡」 南島原市文化財調査報告書第12集 南島原市教育委員会
本多和典編 2018 「宮野遺跡」 南島原市文化財調査報告書第13集 南島原市教育委員会



第2図 野中遺跡周辺遺跡位置図 (S = 1/60,000)

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成12年度、長崎県島原振興局（以下振興局）により、有家町原尾地区のは場整備事業が計画された。事業計画は約110haである。旧有家町教育委員会は振興局の依頼を受け、野中遺跡を含む原尾地区の試掘・確認調査を実施した。

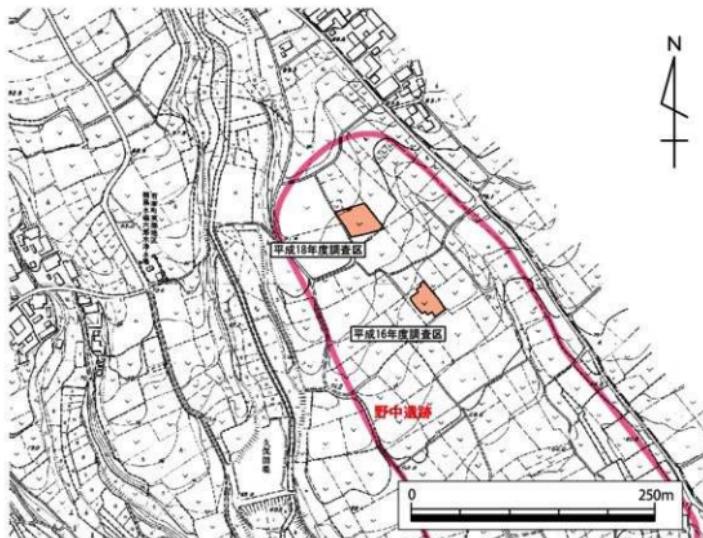
調査の成果をもとに開発部局と協議・調整を重ねた結果、野中遺跡、山之内遺跡、高原遺跡、木場遺跡の4遺跡について本調査が必要であると判断した。野中遺跡については、平成16年度、18年度に本調査を実施した。

第2節 調査方法と調査経過

野中遺跡範囲内において、事業の水路部分及び切土部分を本調査対象範囲とした。調査面積は、平成16年度が578m²、平成18年度が919m²（拡張後）である。表土剥ぎは重機を用いて行った。表土より下層については人力で掘削し、必要に応じて重機を併用した。

平成16年度調査では、調査区をA～Lの小調査区に分割した。遺構はピット等を複数確認しており、図化作業や写真撮影による記録を行った。

平成18年度調査では、調査当初に設定した調査区から大きく拡張する必要が生じ、北側に拡張区を設けている。検出した遺構は実測図作成及び写真撮影による記録を行ったが、拡張区においては調査期間の都合上、十分な記録作業を行えず、主要な遺構の記録に留まる結果となった。



第3図 本調査区位置図 (S = 1/5,000)

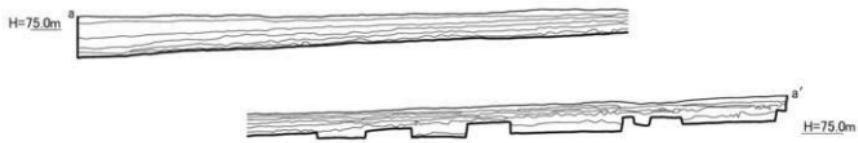
第Ⅲ章 調査の成果

第1節 土層

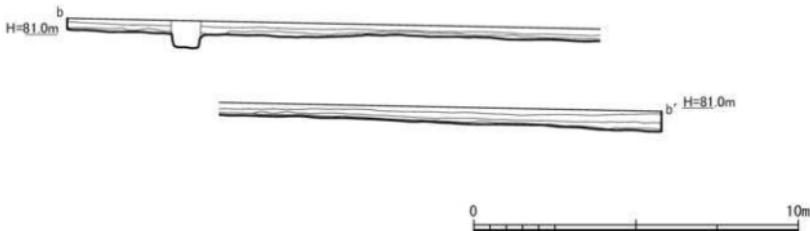
野中遺跡で確認した遺物包含層は、黒褐色土層と、明褐色土層の2層であった。なお、層序や層位名の記録は失われており、土層図の記載には不十分な点がある。

堆積状況は地形の傾斜に沿う形となっており、北西から南東に緩やかに下る。また、包含層からは弥生時代中・後期、縄文時代後・晚期の遺物が主体として出土している。

平成16年度調査A区西壁



平成18年度調査拡張区北壁



第4図 土層断面実測図 (S = 1/150)

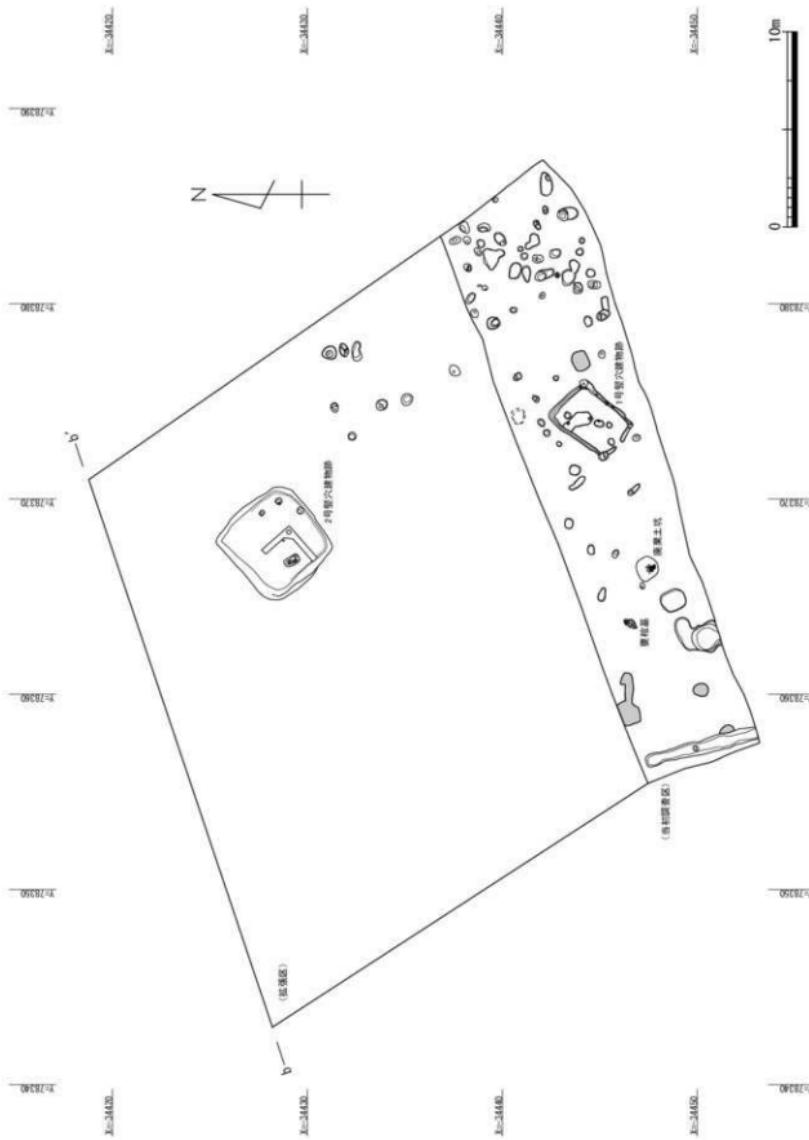
第2節 遺構

平成16年度調査・18年度調査ともに、遺構は明褐色土層から検出した。主要な遺構はいずれも平成18年度調査区から確認しており、竪穴建物跡2基、甕棺墓、廃棄土坑などがある。

第5図 平成16年度調査区遺構配置図 (S = 1/250)

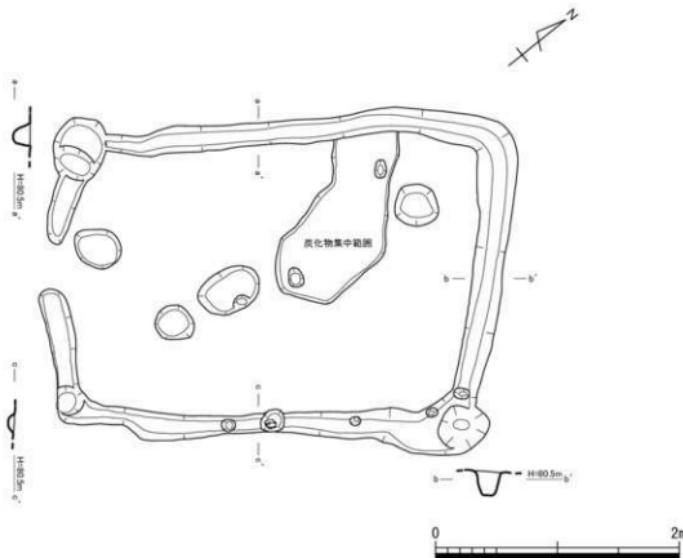


第6図 平成18年度調査区遺構配置図 (S=1/250)



(1) 1号竪穴建物跡

平成18年度調査区の南側で確認された、長方形の竪穴建物跡である。平面プランは長軸3.6m、短軸2.6m、周溝の深さは最大で約20cmである。遺構内北側では炭化物が集中した範囲を確認した。また、周溝内から弥生土器を確認している。



第7図 1号竪穴建物跡実測図 ($S=1/40$)

1～3は弥生土器である。1は壺の口縁部である。端部は丸みを持つ。2は壺の颈部から胴部片か。断面三角形の突帯を2条施す。上端の平坦面が僅かに残存している。3は壺の胴部片か。突帯があり、刻目を施している。



第8図 1号竪穴建物跡出土遺物実測図 ($S=1/3$)

第1表 1号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	調査区	器種	部位	色調		胎土	備考
				外面	内面		
1	H18-当初	壺	口縁部	10YR6 4 にぶい黄橙	10YR6 3 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英、雲母	媒土着(10YR3 1黒褐)
2	H18-当初	壺	颈部～胴部	10YR7 4 にぶい黄橙	10YR7 4 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英	2条の突帯
3	H18-当初	壺	胴部(突帯部)	10YR6 6 明黄褐	10YR7 3 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英、雲母	

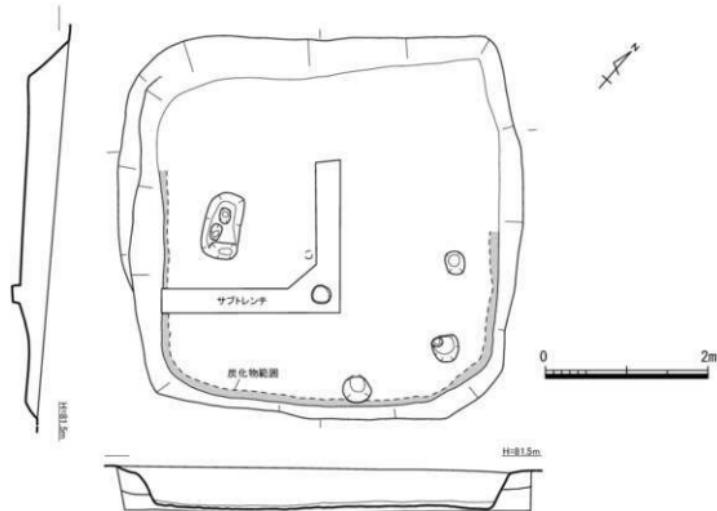
(2) 2号竪穴建物跡

平成18年度調査区の北側で確認した竪穴建物跡である。周囲は近現代の削平を受け、遺構の残存状況は悪かったが、竪穴部の掘り込みは明瞭に確認できた。平面プランは方形であり、北西・南東軸及び北東・南西軸ともに約4.8mである。遺構内からは弥生時代中・後期の土器を確認している。

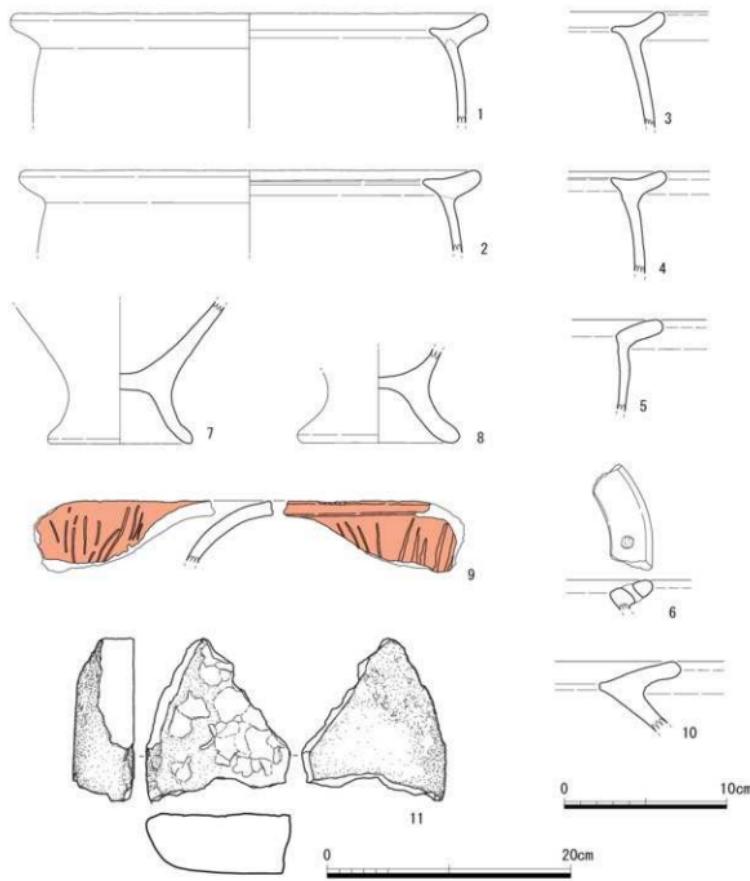
1～8は弥生土器の甕である。1～4の口縁部の断面形は鋤先状となり、内面に短くつまみ出しを行う。6は口縁部に穿孔を入れる。7・8は台付甕の脚台部である。

9・10は弥生土器の壺である。9は丹塗りを内外面に施す。摩滅し明瞭でないが、内外面に暗文を施している。10は頸部が大きく外傾する広口壺であろう。

11は安山岩製の台石である。片面には敲打痕を残す。



第9図 2号竪穴建物跡実測図 (S=1/60)



第10図 2号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1~10: S=1/3, 11: S=1/4)

第2表 2号竪穴建物跡出土遺物観察表①

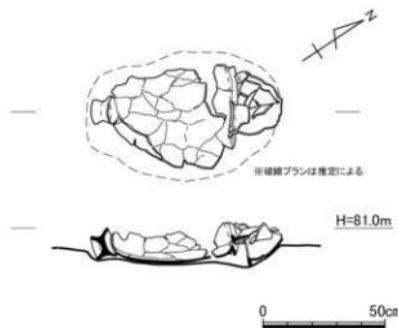
番号	調査区	器種	部位	色調		胎土	備考
				外面	内面		
1	H18-瓶張	甕	口縁部～胴部	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英、雲母	
2	H18-瓶張	甕	口縁部～胴部	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	
3	H18-瓶張	甕	口縁部～胴部	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	角閃石、長石、石英、雲母	
4	H18-瓶張	甕	口縁部～胴部	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	角閃石、長石、石英、雲母	
5	H18-瓶張	甕	口縁部～頭部	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/4 にぶい黄褐	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	
6	H18-瓶張	甕	口縁部	10YR5/2 灰黃褐	10YR7/4 にぶい黄褐	角閃石、長石、石英	
7	H18-瓶張	台付甕	脚台部	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄褐	角閃石、長石、石英、雲母	
8	H18-瓶張	台付甕	脚台部	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	角閃石、長石、石英、雲母	
9	H18-瓶張	甕	口縁部	7.5YR7/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	角閃石、長石、石英、雲母	丹塗り、暗文
10	H18-瓶張	甕	口縁部～頭部	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	

第3表 2号竪穴建物跡出土遺物観察表②

番号	調査区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
11	H18-瓶張	台石	安山岩	13.3	11.9	5.0	931.3

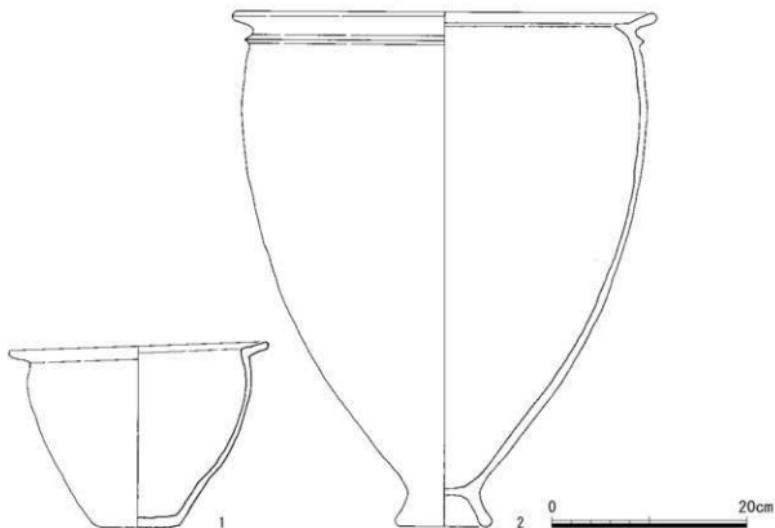
(3) 壺棺墓

弥生時代中期の上甕と下甕で構成される壺棺墓である。後世の削平により遺構の上部は失われ、埋設角度は不明である。遺構の主軸は北東（N-34°-E）に向かう。残存する掘り込みは長軸約80cm×短軸約50cmとなる。壺棺の規模から小児用のものであろう。



第11図 壺棺墓実測図 (S=1/20)

1は甕棺墓を構成する上壺であり、器種は鉢である。剥落しているが、丹塗りを施している箇所が部分的に確認できる。2は下壺である。器種は台付壺で、口縁部は断面鋸先状となり、内面に短くつまみ出す。頸部から口縁端部にかけてやや斜め上方に立ち上がる。また、頸部には断面三角形の突帯を1条付す。



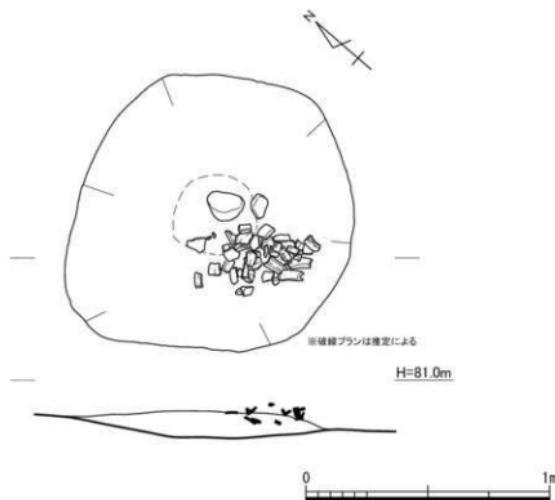
第12図 甕棺墓出土遺物実測図 (S = 1/5)

第4表 甕棺墓出土遺物観察表

番号	調査区	器種	部位	色調		胎土	備考
				外面	内面		
1	H18-当初	鉢	一部欠	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英	丹塗り
2	H18-当初	台付壺	一部欠	7.5YR5-3 にぶい褐	7.5YR5-3 にぶい褐	角閃石、長石、石英	

(4) 廃棄土坑

直径1m程度の円形プランを持つ廃棄土坑である。削平により遺構の残存状況は悪い。遺構残存部からは弥生土器が出土している。



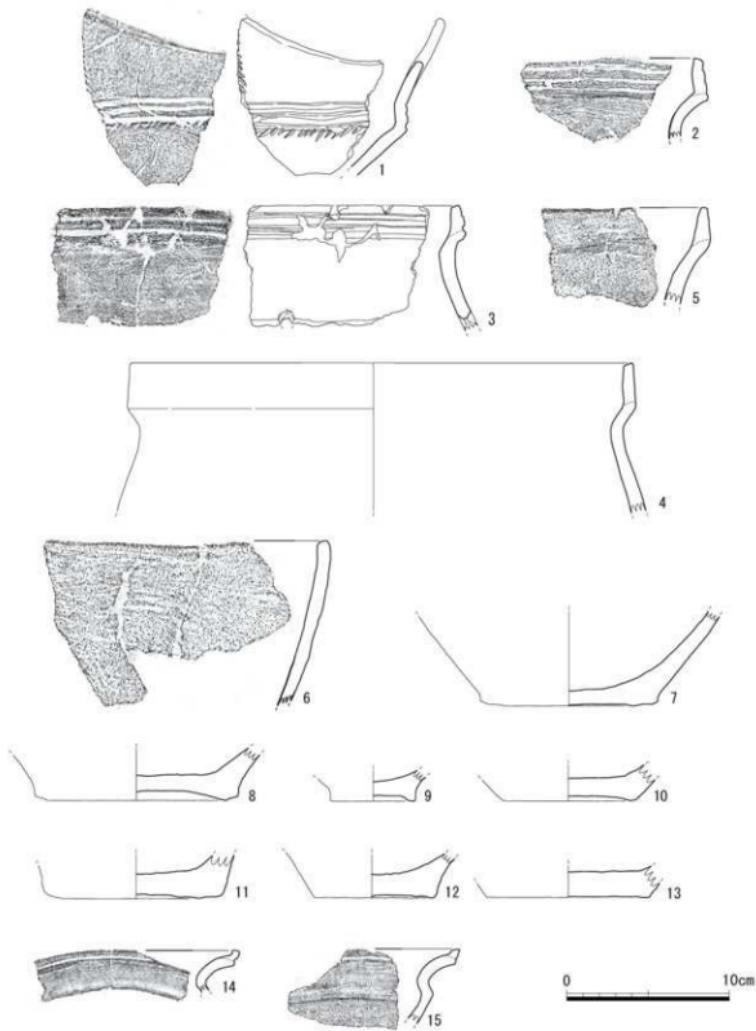
第13図 廃棄土坑実測図 (S=1/20)

第3節 出土遺物

(1) 土器・陶磁器

縄文時代の土器

1は縄文時代後期の浅鉢口縁部である。波状口縁であり、外面に沈線と細かい刻目を施す。2～5はタガ状口縁を持つ資料である。2～4は頸部から口縁部がやや内傾し、5は直立する。3は内外面から焼成後に穿孔を施している。6は砲弾型の深鉢口縁部である。7～13は底部の資料である。7～12は上げ底であり、13は平底である。14・15は浅鉢の口縁部である。どちらも頸部で大きく外反し、口縁部は短く立ち上がる。



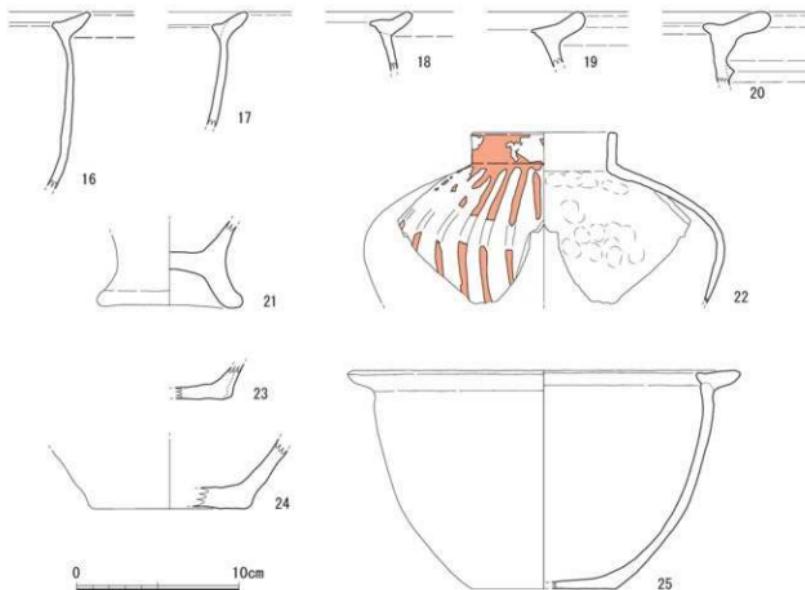
第14図 出土土器・陶磁器実測図① (S = 1/3)

弥生時代の土器

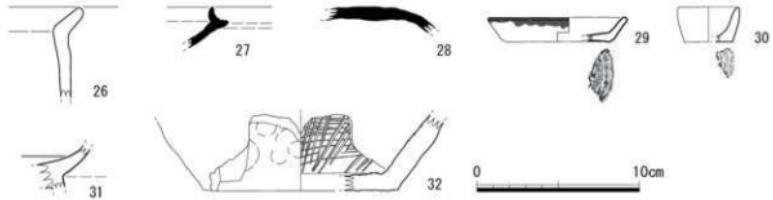
16~20は弥生時代中期の壺口縁部の資料であり、いずれも口縁部は断面鋸先状であり、内面に短くつまみ出す。20は口縁部が発達し、頸部下には断面三角形の突帯を1条付す。21は台付壺の脚台部で、やや小ぶりである。22は頸部から口縁部が直立する直口壺である。外面には丹塗りと暗文を施している。胴部の丹塗りは暗文部分にのみ残存しているが、もとは全面に施していたものが剥落したと考えられる。内面は指頭圧痕が顯著に残る。23・24は壺もしくは壺の底部である。どちらも平底である。23は外面に丹塗りを施す。25は鉢である。口縁部は逆L字状となる。

古墳時代以降の土器・陶磁器

26は土師器である。内外面にケズリによる調整を施す。27・28は須恵器である。27は壺である。28は外面に自然軸がかかること。蓋か。29・30は土師質土器である。どちらも底部は回転糸切り痕を残す。29は小皿である。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用したものと考えられる。30はミニチュア土器である。31は龍泉窯系青磁碗の腰部から高台部である。32は瓦質土器の擂鉢である。



第15図 出土土器・陶磁器実測図② (S = 1/3)



第16図 出土土器・陶磁器実測図③ (S = 1/3)

第5表 出土土器・陶磁器観察表①

番号	調査区	出土層位	器種	部位	色調		胎土	備考
					外面	内面		
1	H16-E	4層	浅鉢	口縁部	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	角閃石、石英、雲母	
2	H16-J	3層	深鉢	口縁部	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英、雲母	
3	H16-D	3・4層	深鉢	口縁部	7.5TR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	角閃石、長石、石英、雲母	
4	H16-A・B・C	2.3.4層	深鉢	口縁部	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	角閃石、石英	
5	H16	-	深鉢	口縁部	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	
6	H16-A	4層	深鉢	口縁部	10YR8/6 黄橙	10YR8/3 黄橙	角閃石、長石、雲母、赤色粒子	
7	H16-P	-	深鉢	底部	2.5YR7/4 浅黄	2.5YR7/3 浅黄	角閃石、長石、石英、雲母	
8	H16-A・D	3・4層	深鉢	底部	7.5YR6/4 にぶい褐 10YR5/3 にぶい黄褐	2.5Y5/3 黄褐	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	
9	H16-A	3層	深鉢	底部	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	
10	H16-L	3層	深鉢	底部	2.5Y7/3 浅黄	7.5YR7/4 にぶい橙	角閃石、長石、雲母、赤色粒子	
11	H16	-	深鉢	底部	10YR8/6 黄橙	10YR8/3 浅黄橙	角閃石、長石、雲母、赤色粒子	
12	H16	-	深鉢	底部	7.5YR6/6 橙	2.5YR7/3 浅黄	長石、雲母、赤色粒子	
13	H16-D	4層	深鉢	底部	10YR7/6 明黄褐	10YR6/2 灰黄褐	角閃石、長石、石英、雲母	
14	H16-E	4層	浅鉢	口縁部	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	角閃石、石英、雲母	
15	H16-E	3層	浅鉢	口縁部	2.5Y5/3 黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	煤付着(10YR3/1黒褐色)
16	H18	-	甕	口縁部～胴部	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英、雲母	煤付着(10YR3/1黒褐色)
17	H16-G	2層	甕	口縁部～胴部	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	
18	H16-L	-	甕	口縁部	7.5YR4/3 褐	7.5YR6/4 にぶい黄橙	角閃石、長石、石英、雲母	
19	H16-D	2層	甕	口縁部	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	角閃石、長石、石英、雲母	
20	H16-A	2層	甕	口縁部	7.5YR6/6 橙	10YR5/2 灰黄褐	角閃石、長石、石英、雲母	
21	H16-K	3層	台付甕	脚台部	10YR5/6 黄褐	10YR4/4 褐	角閃石、長石、石英、雲母、赤色粒子	
22	H16-H	2層	甕	口縁部～胴部	2.5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙	角閃石、長石、石英、雲母	丹塗り、暗文
23	H16-E	2層	甕	底部	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	角閃石、長石、石英	丹塗り
24	H16-J	4層	甕	底部	2.5YR7/3 浅黄	2.5YR6/2 灰黄	角閃石、長石、雲母	
25	H18	-	鉢	口縁部～底部	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	角閃石、長石、雲母	
26	H16-D	1層	甕	口縁部	7.5YR2/2 黒褐	7.5YR6/4 にぶい橙	角閃石、長石、石英、雲母	

第6表 出土土器・陶磁器観察表②

番号	調査区	出土層位	器種	部位	色調		胎土	備考
					外面	内面		
27	H16-D	表土	环	口縁部	5Y5/1 灰	5Y6/1 灰	長石	
28	H16-B	2層	蓋	体部	N7/0 灰白	N6/0 灰	長石、赤色粒子	
29	H16-D	1層	小皿	口縁部～底部	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	角閃石、石英、雲母	口縁部に環付着、底部回転糸切り
30	H16-D	1層	ミニチュア	口縁部～底部	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	長石、雲母、赤色粒子	底部回転糸切り
31	H16-C	表土	青磁	腰部	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	-	
32	H16-D	表土	擂鉢	体部～底部	10YR6/2 灰黄褐	5Y7/1 灰白	長石、赤色粒子	

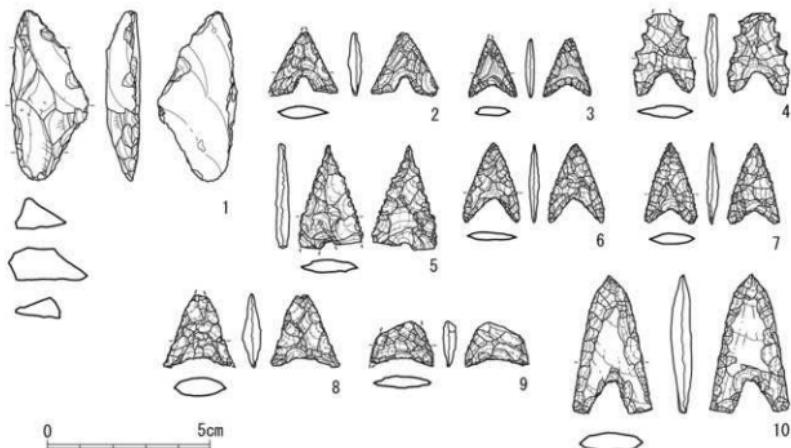
(2) 石器

1は安山岩製のナイフ形石器である。2～10は石鎌であり、いずれも凹基鎌である。2は基部に深い抉りが入る。3は局部磨製石鎌である。4・5は両側縁に連続的な細かい抉りを施した鋸歯鎌である。8・9の基部は浅い抉りを持つ。10は安山岩製の石鎌であり、他の石鎌に比べ大型である。

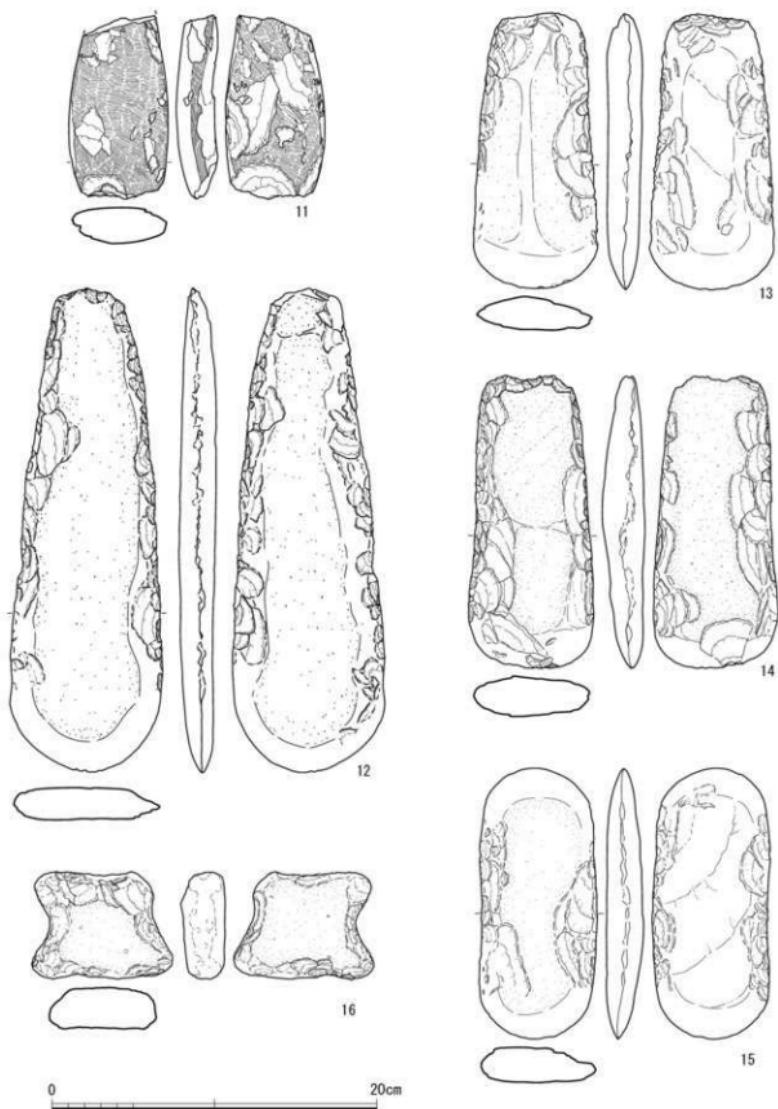
11～15は磨製石斧である。11は蛇紋岩製の磨製石斧で、全面を丁寧に研磨する。12～15は安山岩製であり、いずれも刃部を研磨する。16は安山岩製の礫器と思われる。

17・18は砂岩製の石皿である。17は表裏面に凹部を持ち、18は表面に凹部を有する。19は砂岩を素材とする台石である。20は砂岩製の砥石で、複数の研ぎ面を持つ。

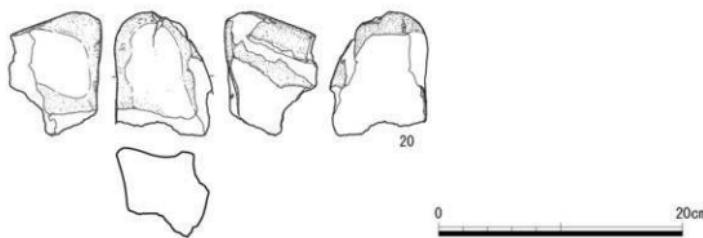
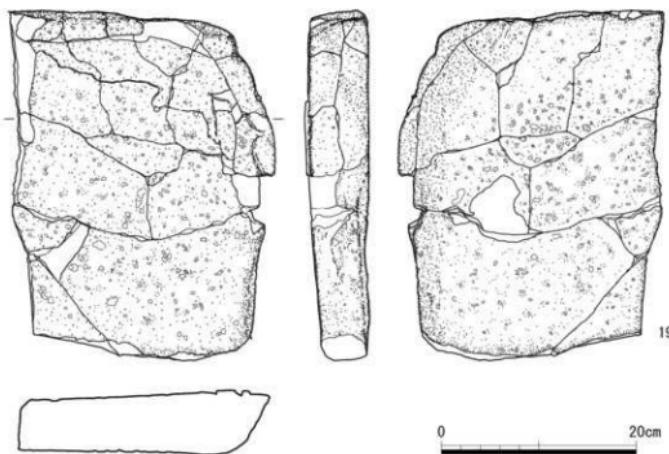
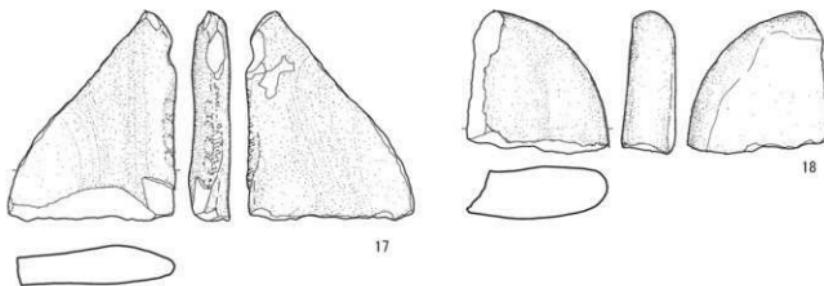
21・22は敲石である。21は乳棒状の敲石である。端部に使用痕があり、表面に微細なサッカ痕を残す。石器製作に用いたものか。22は表裏面と側面に潰痕を残す。23は安山岩製の凹石である。側縁に敲打痕が残る。24は安山岩製の磨石である。表裏面に平滑な面を有する。



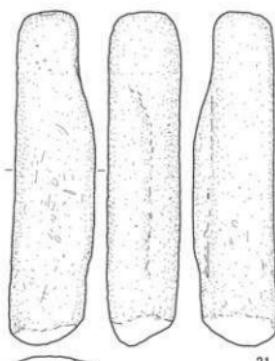
第17図 出土石器実測図① (S=2/3)



第18図 出土石器実測図② (S = 1/3)



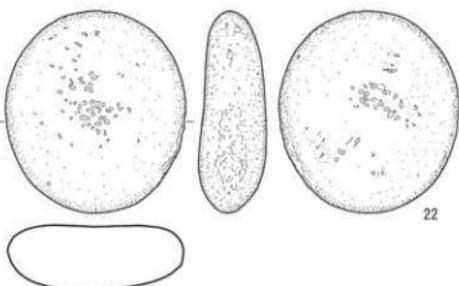
第19図 出土石器実測図③ (17・18・20 : S=1/4, 19 : S=1/5)



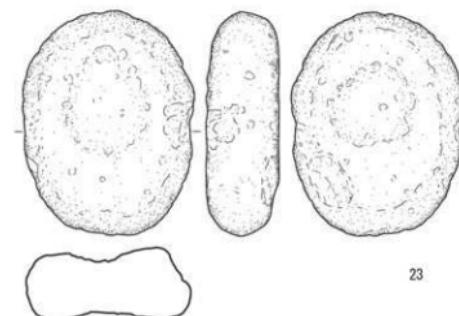
21



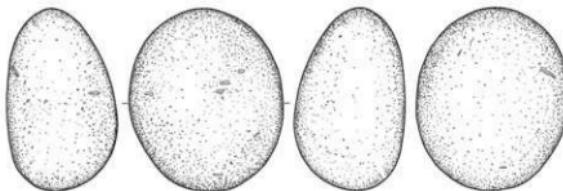
0 10cm



22



23



24

0 20cm

第20図 出土石器実測図④ (21~23 : S = 1/3, 24 : S = 1/4)

第7表 出土石器観察表

番号	調査区	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	H16	—	ナイフ形石器	安山岩	4.7	2.2	1.0	9.0
2	H16-A	4層	石鏃	サヌカイト	2.0	2.1	0.4	0.9
3	H16-J	5層	石鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.3
4	H16-A	4層	石鏃	サヌカイト	2.5	1.9	0.4	1.3
5	H16-A	4層	石鏃	サヌカイト	3.2	2.0	0.4	1.6
6	H16-H	3層	石鏃	サヌカイト	2.4	1.7	0.3	0.6
7	H16-F	4層	石鏃	サヌカイト	2.5	1.6	0.4	0.8
8	H16-B	2層	石鏃	サヌカイト	2.3	2.1	0.6	1.6
9	H16-A	表土	石鏃	サヌカイト	1.4	2.0	0.4	0.8
10	H16-J	4層	石鏃	安山岩	3.8	2.2	0.6	3.4
11	H16-A	2層	磨製石斧	蛇紋岩	11.3	6.1	2.6	240.4
12	H16-C	4層	磨製石斧	安山岩	29.8	9.4	2.3	889.9
13	H16-A	4層	磨製石斧	安山岩	17.0	7.7	2.2	366.5
14	H16	—	磨製石斧	安山岩	18.0	7.7	2.7	439.2
15	H16-A	4層	磨製石斧	安山岩	16.6	7.3	2.3	425.9
16	H16-C	2層	礪器	安山岩	6.6	8.7	2.7	219.3
17	H16-A	4層	石皿	砂岩	17.2	13.9	3.4	764.3
18	H16	—	石皿	砂岩	11.7	11.7	4.5	717.5
19	H16	—	台石	砂岩	35.9	27.2	6.6	8980.0
20	H16-F	2層	砥石	砂岩	10.2	8.1	7.6	614.5
21	H16-G	2層	敲石	頁岩	13.7	3.5	3.0	232.7
22	H16	—	敲石	安山岩	8.3	7.4	2.8	240.6
23	H16-D	2層	凹石	安山岩	9.2	7.1	3.0	222.3
24	H16	—	磨石	安山岩	11.2	9.5	6.8	1000.0

図 版



遺跡上空から有明海を望む（北から）



平成16年度調査空中写真（写真下が北側）



平成18年度調査区南側（北西から）



平成18年度調査区南側作業状況（南西から）

図版 4



平成16年度作業状況①



平成16年度作業状況②



平成18年度測量作業状況



1号竖穴建物跡検出状況



1号竖穴建物跡完掘状況



2号竖穴建物跡完掘状況

図版 6



斐棺墓検出状況



廃棄土坑検出状況



廃棄土坑出土遺物



绳文土器口緣部出土狀況



绳文土器底部出土状况



土器・磨製石斧出土状况

図版 8



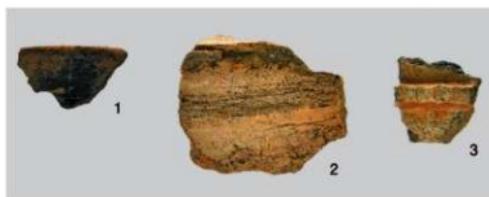
磨製石斧出土状況



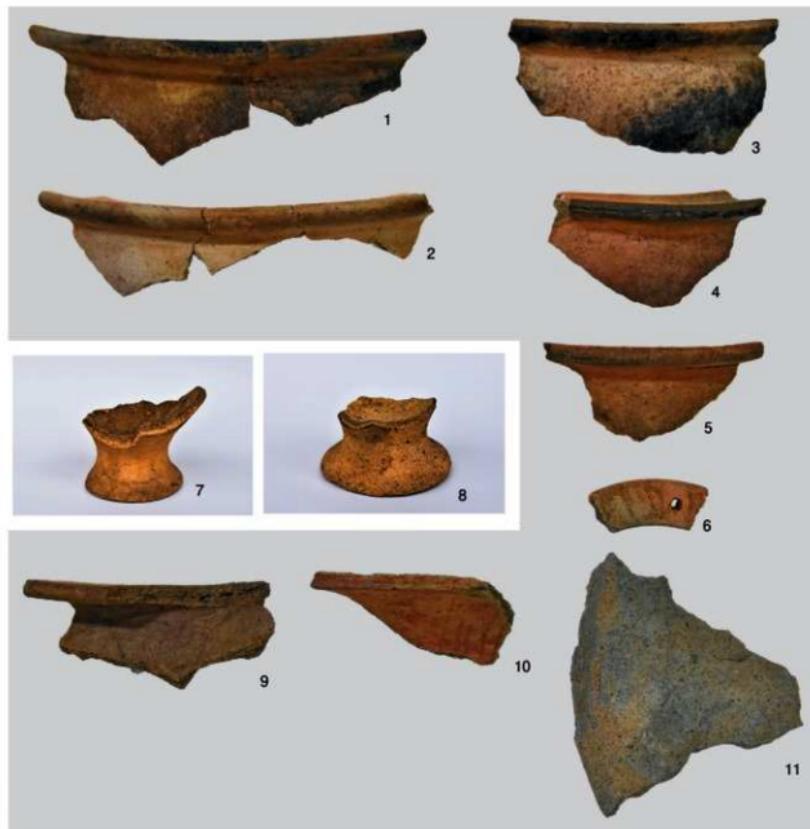
石鏃出土状況



敲石・磨石出土状況



1号竖穴建筑物跡出土遗物



2号竖穴建筑物跡出土遗物

図版10



斐棺墓出土遺物



出土土器・陶磁器①



出土土器・陶磁器②



出土土器・陶磁器③

図版12



21



23



24

出土土器・陶磁器④



26

27

28

29 30

31

32

出土土器・陶磁器⑤



1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

出土石器①



出土石器②



出土石器③



出土石器④



出土石器⑤

報告書抄録

ふりがな	のなかいせき							
書名	野中遺跡							
副書名	県営畑地帯総合整備事業（担い手育成型・原尾地区）に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
編著者名	小川 慶晴							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL0957-73-6705							
発行年月日	西暦2021年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'."	東經 °'."	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のなかいせき 野中遺跡	みなみしまばらし 南島原市 あひだ かとう 有馬町	42214	107	32° 41' 19"	130° 20' 05.7"	20041008 ～ 20041204 20061010 ～ 20061026	578m ² 919m ²	農業基盤 整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
野中遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代	堅穴建物跡 甕棺墓 廐棄土坑	縄文土器 弥生土器 石鎌 磨製石斧				

南島原市文化財調査報告書 第24集

野中遺跡

2021.3.31

発行 長崎県南島原市教育委員会
〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 株式会社 昭和堂

